

HIMALAYA

ヒマラヤ
No.384



2003 NOV



THE HIMALAYAN ASSOCIATION OF JAPAN

日本ヒマラヤ協会

HAJ

2004年HAJサマー・キャンプ隊員募集

カラコルム スパンティーク(7,027m)

パキスタンの登山は、スカルドへのフライトや、ポータートラブルなど、短期間登山にとっては、幾つかの問題がありますが、情報の収集や強力なスタッフ配置、隊員の積極的な参加によって対処して成功に結びつけたいと思います。

記

1. 期間：2004年7月18日(金)～8月25日(月)
2. 募集人員：10名程度
3. 負担金：75万円
4. 資格：冬山の尾根を20kg程度の荷物を持って行動できる人。
5. 申込〆切：11月30日(定員になり次第〆切)
6. その他：HAJの登山隊は「ガイド公募登山」ではありません。準備活動に参加、合宿参加の義務があります。高所ポーターは使用しません。隊員による自力登山です。

チベット カンペンチン(7,281m)

シシャパンマの北麓の大地を進むと屏風のように白い山脈が連なっています。その主峰がカンペンチンと呼ばれる山です。まるでヒマラヤ山脈を守るかのように立派な牙のように鋭峰(北峰)を持った山です。1982年と1998年に日本隊によって登頂されていますが、ルートはその東面を予定しています。

記

1. 期間：2004年7月22日～8月27日(37日間)
2. 募集人員：10名程度
3. 負担金：85万円
4. 資格：冬山の尾根を20kg程度の荷物を持って行動できる人。
5. 〆切：定員になり次第
6. その他：HAJの登山隊は「ガイド公募登山」ではありません。準備活動に参加、合宿参加の義務があります。また、高所ポーターを使用しない隊員による自力登山です。

表紙写真

ジョイ・ドゥール氷河は、チョト・ベルト山群の東、シムシャル峠とシュイジェラブの間から南西に入る氷河である。右からジョイ・サール(c 5,560m)、ジョイ・デスト・イ・サール(c 5,950m)、ジョイ・ドゥール・サール(c 5950m)。

(提供：横浜山岳会)

ヒマラヤ No. 384

- | | |
|-----------------------------|------|
| 1. シムシャルの山と谷 | 亀井 正 |
| 11. ロー・マンタンの空、遥かなり(15) | 高橋 照 |
| 17. 1929年の「ルーズベルト地図」 | 高倉忠博 |
| 21. ヒマラヤニュース〈地域ニュース・ヒマラヤから〉 | |
| 22. パスー峰遭難事故報告 | |
| 24. 寸感・事務局日誌 | |

シムシャールの山と谷

亀井 正

2001年夏、シムシャール川流域の踏査を行った際、ムンガリグ・サール（ルプジョイ・サール）6,034mを登り、ほぼ360度の写真を撮ることができた。帰国後、カラコルムの権威者、宮森常雄氏に問い合わせ、色々アドバイスや資料を戴き、山座同定を行ったが、どうしても同定できない部分があることが分った。特にチョト・ペルト山群、シュイジェラーブ谷、ガンジ・イ・タン（谷）周辺の山域が顕著であった。

もしかすると、この周辺は調査されず、地図の空白部ではないかと思い調べる事にした。範囲はカラコルム・ハイウェーより東、オプラン川の南、ヒスパー氷河の北側の、俗に言うシムシャール・パミールで活動した探検隊等の行動を追ってみた。

1. シムシャール川流域の探検史

1856年、カシミールのハラムク山群にある1峰4,876mに観測台が設けられ、T・Gモントゴメリーにより始めてカラコルム山脈の測量が行われ、K1からK32の高峰が測定されK2（8,611m）が世界第2位の高峰と分ったのである。（Kはカラコルムの頭文字）この測量は主に、カラコルム東面から見える範囲の高峰で、北側にある山は測定されなかった。

イギリスのヤング・ハズバンドは1887年北京を発ち、ゴビ砂漠を横断し、ハミから天山南路をカシュガルに至り、カルガリックよりアギール峠、さらにカラコルム山脈の旧ムズターグ峠を越えてバルトロ氷河に出た。その頃の探検史上で特記される中央アジア横断の旅であった。

彼は2年後の1889年、再びアギール峠を越えてカラコルム北面に入り、ガッシャーブルム氷河、

ウルドック氷河を探検し、さらにインスガイティ（スカムリ）氷河を南インスガイティ氷河の合流点まで探検した。その後シャクスガム川を下り、ブラルド川に入って、シムシャール峠に向かった。

途中ダルワザ（関門）にはカンジュート人の前哨があった。そこでカンジュート人に火縄銃で囲まれ、一戦を交えそうになる。その難をうまくかわし、逆に彼のグルカ兵が取り囲み優位にたった。その一件から彼等の活動が妨げられず、その後10月15日シムシャール峠を越え、パミール・イ・タンのアルバブ・イ・プリエン付近まで下った。そこから谷が峡谷になり、馬では通れず引き返し、シャクスガム川からヤルカンド川を下り、パミール高原タシュクルガンに行き、ミンタカ峠を越えてフンザに出た。

イギリスのジョージ・コッカーリル中佐は1892年の冬期シムシャール谷を遡行して、ヤング・ハズバンドが中国側からシムシャール峠を越えて引き返した地点（ガンジ・イ・タンとアルバブ・イ・プリエンの間）まで探検した。その範囲は広く、モムヒル氷河、マラングッティ氷河、ヤズギール氷河、クルドピン氷河、ヴィルジェラーブ氷河等を調査した。季節も遅く、充分なものとはいえないが、ディスティギール・サール7,885mを発見した事は最大の成果であったとされている。しかし、その内容はロシア等との国境問題で当時は公表されなかった。

今ではジアラット（聖地）の手前までジープが



入るようになったが、コッカーリル中佐はシムシャル谷出合より、険しい谷底を何回もの渡渉と断崖のトラバースでジアラットまでの困難な遡行を成し遂げ、その溪谷を踏査したことは至難のわざであったと思う。

1913年にはK・メイスンらが中心となったインド・ロシア連結合同三角測量が行われ、国境稜線にあるキリク峠の両側の観測点から、西部カラコルムのディスティギール・サール及びモムヒル・サールを含む数多くの山の位置と高度とを測定をした。

またシュヌク4,021mの観測点から、グジェラーブ川流域の山塊、カールーン・コーを最高峰に未確認の6,000mを越す山がかなりの数にのぼる事を確認した。しかし、山塊の中心部の見通せない部分は測定できていない。

オランダのヴィッサー夫妻は、1922年より1930年の間に4回の探検を行った。そのうちの1925年6月にパサー氷河を測量し、更にクンジェラーブ峠及びバルビク峠に達した。それからクンジェラーブ谷のククセルからチャプチンガル峠を越えて、グジェラーブ谷上部に入り、オプラン川との分水嶺付近まで測量した。そこから一転してボエサム峠を越えてシムシャル谷に入り、クルドピン氷河、ヴィルジェラーブ氷河、ヤズギール氷河、マラングッティ・ヤズ氷河その他シムシャル谷下流域の小さい氷河3ヶ所を探検した。

その結果、これらの氷河の源頭がヒスパー山群の分水嶺であること、そしてルクベ・ラオ及びヒスパー氷河との相対的位置関係が明らかになった。残念なことに天候が悪かったため分水嶺の写真は撮られていない。帰路カールーン・ピル(峠)を越えフンザに帰った。

その調査での地図にはチョト・ペルト山群のギム・ギムを標高5,568m、プルジン・ペルトの標高5,995m、チョト・ペルト山群東端の山を6,343mとしている。

H・F・モンタニエーとC・J・モリスは1926年シムシャル峠を越え、シャクスガム谷を遡上ってキアガル氷河を探検しようとカールーン・ピルを越え、シムシャル谷に入った。しかしシムシャル村でシムシャル峠を越えてはならぬと

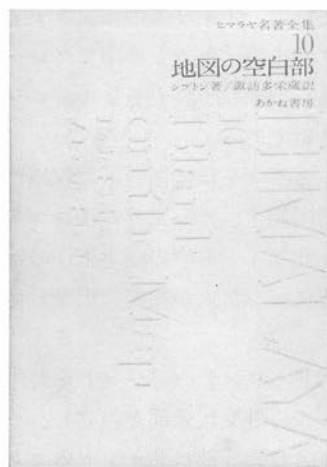


いう許可取消の伝令を受け、しかたなく1925年ヴィッサー夫妻が残したグジェラーブ谷下部を合流点まで測量した。曇天で雪解水は少なかったが、大変難しい谷であった、と記されている。それから、チャプルサン谷に入りヤシュクク及びスキエンジの氷河の源頭まで測量し、それによりフンザ川上流の測量が完成した。

R・C・Fショーンバーグは1934年5月フンザを発ち、パサーでフンザ川を渡ろうとしたが増水で渡れず、カールーン・ピルを越えシムシャル川に出た。シムシャル村に着くと3日間滞在し村の生活など調査している。それからシムシャル峠に向かい、ザルド・イ・ガル(谷)よりウインサール峠、シャチ・ミルク峠を通りアルバブ・イ・プリエン、そしてシュイジェラーブに着き、そこでシュイジェラーブ谷を中間あたりまで調査した。

6月10日にシムシャル峠を越え、シュウェルトの夏村を通りチカル村まで行き、そしてブラルド谷の下流域を調査した。計画ではシャクスガム川を遡行し、サルボ・ラッゴ氷河まで行く予定であったが、食糧補給の失敗と川の増水で断念。計画を変更して、オプラン川を遡行し、オプラン峠を越え、さらにクンジェラーブ峠から西のクンジェラーブ谷を下り、フンザのミスガルに帰った。

同年8月5日、再び準備を終えると、シュイジェラーブへの新ルートを求め探検に出た。ギルチャを発ち、カールーン・コー峰の北側およそ6,000m付近をトラバースして、スベ・スィンゴ峠5,970mから同名の谷を下り、グジェラーブ谷の上部に



出ている。

その一帯はシムシャール人の冬季放牧用の小さい平地が多くある開けた所で、その先ソクソク・イ・ドゥールを登りつめ、ボエサム峠を越え、シュポディンの夏村に着く。そこからガラガラに崩れた谷を登りつめて、シュポディン峠からマイ・ドゥール(谷)を下り、シュイジェラールに向かった。そしてシムシャール峠を越え、再びブラルド谷を中間辺りまで登り、カラコルム分水嶺を確認。その隣のウェスム・イ・ドゥールを上部氷河の見える所まで登り、インスガイティ氷河との分水嶺であることを確認している。

その後、東のラスカム川を遡行、アギール峠に達しようとしたが、ラスカム川の増水でアズガルまでで引き返す。帰路はシムシャール峠を越え、シムシャール川を下ってフンザに帰った。

E・E・シプトンは1937年、カラコルム最後の空白部と言われたシャクスガム川上流域のK 2北面より、シムシャール峠までの測量を行った。

その際、ブラルド川流域及びシムシャール峠とシュウェルト氷河下部までの東部を測量したが、シムシャール峠西部及びチョト・ベルト山域、パミール・イ・タン流域は残された。その時に調査した地図にはシムシャール峠は標高4,735m、ムンガリグ・サールの標高は6,050m、シュウェルト氷河出合いの左岸の山を標高6,130m、それとチョト・ベルト山群ジョイドゥール氷河南端の山を標高5,930mとしている。

2千数百平方キロに及ぶ未踏の地を正確に測量し、地図に残したのである。この偉業を残した遠

征隊は隊員4名、シェルパ7名、ポーター4名、総勢15名という小さな遠征隊であった。

この地域は第2次世界大戦の1939年～1945年、1947年のインド・パキスタン独立戦争で入域できない状況が続いた。その後の1954年にイタリア隊がK 2を登頂。1955年には京都大学隊がヒスパー・ピアフォ・バルトロの三大氷河踏査。1959年にイタリア隊がカンジュト・サールに登頂。1960年にはオーストリア隊がヒスパー山群のディスティギール・サールとトリボールの初登頂に成功したが、いずれの隊もヒスパー氷河側からの登山だった。

それ以降1961年～1974年の間、カラコルムは外国人の入域が原則として禁止となった。だが、1964年オーストリア隊がモムヒル・サールに登頂。1971年ポーランド隊がクンヤン・キッシュに登頂。1977年大阪登攀クラブがタフ・ルタムに登頂したが、これも全てヒスパー氷河側からの登山であった。

1975年『岩と雪44号』に「ヒスパー山塊の研究」と題してイェルジ・ワラがヒスパー山塊の山座同定、高度の推定等を行い、地図を発表している。しかしチョト・ベルト山群など私達が目的とする周辺は含まれていない。

(カラコルム地図 スイス J・ワラ製作)

時代を経て、1983年酒田ヒマラヤ研究会(山形県)のパーティーがシムシャール村からヴィルジェラール氷河を14kmほど入った右岸の支流を遡行し、チャパチポンド峠からシュウェルト、そしてシムシャール峠を越え、シムシャール村に帰っている。たぶん現地の人以外、初めてとられたルートだと思う。報告書はスケッチ、手書きのルート図等詳細に書かれ、ありきたりの報告書より立派である。

2. 忘れられた地域

推測するに、最初のヤング・ハズバンドはシムシャール峠を確認しただけであり、ジョージ・コッカーリルはヴィルジェラール氷河の調査を行い、チョト・ベルト山群の南面は見ているが、氷河が深く入り込む北面は見えていない。インド・ロシア連合同三角測量は測量点から遠いうえ、チョト・ベルト山群、シュイジェラール谷流域の山は標高が低いので観測出来なかった。ヴィッサー隊もヴィ

ルジェラブ氷河を調査したが、ジョージ・コッカーリル隊と同様である。

ショーンバーグはシュイジェラブ谷に入り、右岸より入り込む大きな氷河の接合部の下流、左岸の小さな溪谷（東シュイジェラブ氷河）の右手を登り、シュイジェラブ谷の見渡せる所まで登っている。その時ショーンバーグは「ここまで約20マイルである」（未知のカラコルム、志摩礫郎訳）と記しているが、奥まで約11マイルしかない氷河で、何かの間違いである。したがってショーンバーグは中間あたりまで登ったが測量はしていない。シプトンもカラコルム北部の測量を行った際、シュウェルト氷河の東側下流までで終わっている。したがって、ガンジ・イ・タン、シュイジェラブ谷、シュウェルト氷河、チョト・ベルト山群は測量から残されてしまった。

3. 調査されなかった理由

前述の通り、この地域の調査はあまりされていない事が判った。なぜ調査がされなかったか。まず地形的条件が厳しいこと。

シムシャル谷及びグジェラブ谷は、入り口付近は険しい峡谷で直接谷に入れず、捲き道から標高5,000mの峠を越えるとなると数日を要した。峡谷の中に入ると6月頃から一気に気温が上がり、8月初旬までは増水期となる。現在は要所に吊橋がかかっているが、当時は渡渉するか高捲きするしかなかった。また10月に入れば雪が降り始め、5月頃まで峠は雪に閉ざされてしまい、活動出来る期間はごく短かった。

そうした苦勞の割りにこの地域の奥には6,000m級の山しかない。ショーンバーグも「シムシャル・パミールを構成する山々は、カラコルム東部のあの偉容と気品とに比較してとうていおよばない」と評している。当時は7,000～8,000mの山がもっと手近に有るのに、わざわざここに入る探検隊や登山隊は少なく、入っても小規模の探検隊で大掛かりの測量等が行われなかった。

更に別の問題として、政治的問題があった。19世紀後半から20世紀前半にかけて、帝政ロシアの領土拡大をねらって南下する目論見に対して、インドを植民地としていたイギリスとの間で情報戦

がくりひろげられていた。イギリスの作家ラディヤード・キプリングが小説「キム」の中でグレート・ゲーム（大勝負）と呼んだ、イギリス、ロシア二大帝国の情報合戦である。

ロシアは西トルキスタンをはば領有下に収めた後、さらに1882年清国領土、カシュガルにロシア領事館を開設した。北部インドへの南下工作の始まりでパミール周辺にロシア人が頻繁に出没しはじめたのである。

そこでイギリスはF・ヤングハズバンドを起用し、1890年カシュガルに外交代表部を設立し、パミールの現状を調査させた。彼は北インドのカシミール、カラコルム、パミール山塊の峠という峠を片端から踏査した。当時のフンザやナガールは盗賊の国（シムシャルも含まれていたと思う）と言われ、カラコルム峠付近やバルチスタン方面にかけて隊商を狙い掠奪を行っていた。イギリスはその盗賊が通る道を探るのが名目であると言いながら、ねらいはロシアに対しての情報収集及び潜入ルートなどを探る事の方が大きかった。

その後、フンザやナガールは清朝に朝貢外交を続けていたが、清朝が弱体化した隙に乗じて、ロシアのグロムチェフスキー大尉はキリク峠よりフンザに侵入してフンザ領主に会い、ロシアの同盟国にしようとした。フンザがロシアと同盟国になると不利になるイギリスは、抵抗するフンザ領主を制圧し、1891年に新領主にマハマッド・ハンを擁立して、一応混乱をおさめた。ロシア、イギリス統治下のインド、清国の三つどもえで互いに牽制しあっている地区、パミール、ヒンドウークシュ、カラコルム北部一帯は、探検などの活動は行えない状況であった。

4. 踏査活動

今回は、前回2001年の踏査行で山座同定が充分に出来なかったのを踏まえ、その山域を私達の出来る範囲で再度調査しよう、という目的で実施した。パスルからシムシャル川に入り、パミール・イ・タンそしてシムシャル峠、ここをベースとして10日間踏査する。そしてチョト・ベルト山群の知られざる氷河の奥の6,000mの無名峰とムンガリグ・サル6,034m、及びシュイジェラブ

谷とガンジ・イ・タンの接点にある6,200mの無名峰を登り、その位置と高度を測定するとともに、各谷の合流点の位置と方位などを調べることにした。

その後二つのパーティーに別れ、1隊はボエサム峠を越え、グジェラーブ川に入り、そしてチャプチンガル峠を越え、ククセルに出る。もう1隊はクルドピン氷河を登り、同名の峠を越えてヒスパール氷河に入り、ナガールに下る。

しかし、今回は天候が悪く、30日間で一日中晴れたのは7日間しかなかった。そして雪が降り、氷河はヒドンクレバスが多くなり、また雪崩を起こすような状態となった。実際にチョト・ペルト山塊に入る氷河はヒドンクレバスが多く、目的の6,000m峰は登ることが出来なかった。また、シュイジェラーブ谷の6,200m峰に取り付けられないため、その手前のピークに登ろうとしたが、頂上直下で表層雪崩がおき、断念せざるを得なかった。

そんな状態の中でもムンガリグ・サールを再び登り、位置の確認と360度の写真を撮ることが出来た。

両踏査隊はともに途中で前進を断念したが、最終地点のボエサム峠、それとクルドピン氷河出合いより約12km入った東西クルドピン合流点まで、34ヶ所の位置測定を行う事が出来た。これらの地域には今まで誰も入っていない谷も多々あるし、まして位置測定がされていない場所である。

今回は日数が少ない割には少し範囲が広すぎた感がしないでもない。天候の悪くなる事を予想して、余裕をもった日数で計画すべきであった。余裕があれば目的の山に登れ、もっと広範囲の踏査結果が得られたと思う。

5. 踏査記録からの考察

「シムシャール川からシムシャール峠」

シムシャール川から出合の深いゴルジュを高捲いてパミール・イ・タンに入ると、南側（左岸）にはヒスパール山群の北方に位置するカラコルム的なチョトペルト岩峰群、北側（右岸）には頂上付近に氷冠をかぶったパミール的な丸い雪山が展開する。

ガンジ・イ・タンの出合を過ぎるあたりからパ

ミール・イ・タンの谷は広がりシムシャール峠まで草原が続く。ガンジ・イ・タンの出合より下部は深いゴルジュである。

「チョト・ペルト山群」

西端はヴィルジェラーブ谷とパミール・イ・タンとの合流点で、東端はチャパチポンド峠となり、両谷に囲まれた山群である。

チョト・ペルト山群の西端にはギム・ギム峰5,569mがあるのだが、乱立する山でどれを指すか不明である。ショーンバーグは「左手にはプット・プットの岩峰があり、右手はるか遠くにはギム・ギム峰が見える」と記している。

パミール・イ・タン中流で南に入るゴルジュの谷がある。4km入った所で南と東に別れ、村人は南へ向かう谷をチョト・ペルト・ナラ、東へ向かう谷をプルジン・イ・ドゥールと呼んでいる。そこから両谷は大きく扇状に広がり、チョト・ペルト山群の中央部を形成している。

チョト・ペルト・ナラは南に入り込み、入り口はゴルジュで、奥で二つに別れ、チョト・ペルト5,950mとカレジン・ペルト5,900mの岩峰と壁に囲まれた深い谷である。

東に別れたプルジン・イ・ドゥールは3本に別れ、その中の左側の氷河はジョイ・ドゥール氷河との掠奪点となる。その掠奪点の手前にコルがあり、楽に西ジョイ・ドゥール氷河に越えることができる。かつて村人はガンジ・イ・タン側に渡る橋が無かった時代はそのコルを越えていた。そのルートがシムシャール峠へ行く裏道である。

ジョイ・ドゥール氷河はチョト・ペルト山群の東、シムシャール峠とシュイジェラーブの中間から南西に入る氷河である。今までの地図では谷名は表記されていなかった。村人によるとジョイ・ドゥールと呼んでいる。ジョイ・ドゥールは出合いから4kmほどで分岐し、平行に南に延びている。両谷に入り調査を行ったが、今までの地図より谷はかなり大きい。

東ジョイ・ドゥール氷河は約8kmあり、西の方へ回り込むようにして終わる。その南端のアイスフォール上に標高5,930m峰がある。これはシプトン隊のスパンダーがザルサニック谷側から測定した山と思われる。

西ジョイ・ドゥール氷河は5km程で終わるが、西に回り込むようにしてプルジン・イ・ドゥール氷河との掠奪点となる。出会いは狭いが東、西とも中で広がり複雑な地形になっている。

チョト・ペルト山群は今まで6,000m以上の山は7座ほどであると記録されているが、ムンガリグ・サールより見る限り6,000mを越える山は一山しか無い。クズ・サール及びジョイ・サールより奥のCOLからの観察、それと航空写真などから判断するとプルジン・イ・ドゥール中央南の源頭に約6,100mの無名峰があり、チョト・ペルト山群の一番高い山と推定できる。今までの地図と比較して谷の流れや尾根の出方が変わっていることも判明した。(本書添付の地図と、既刊地図とを照合されたい)

「シュイジェラブ氷河流域」

シュイジェラブ氷河全体は本流と9本の支流からなりたっている。その中の主流と思われる氷河は北の中国領のオプラン川の支流氷河と繋がっている。シムシャール川流域の北側、パミール・イ・タンの源流では最大の氷河である。

シュイジェラブ夏村から約3km入ると左岸より東シュイジェラブ氷河が流れ込み、標高差300mほどの崖のモレーンとなっている。そこを登ると氷河舌端となり、北東に10kmほど延びている。その分水嶺には約6,150mの山が3峰有る。ショーンバグは「左岸からくる氷河はドーム形のピークに達する広大な雪原を有し、分水嶺をこえてシムシャール峠へ行く裏道にもなっている」と記している。しかし、東側は高い雪稜になっていて、越えるにはかなりの力がいる。

シュイジェラブ本流を東シュイジェラブ出合いより3km北に進むと本流氷河の舌端に出る。その右岸から西シュイジェラブ氷河のモレーンが落ちてくる。標高差約300m。上部に西シュイジェラブ氷河舌端が見え、踏査隊はその右岸の山に挑んだ。その後、この山が現地名でハルシャマス・サールと言うことが分かった。しかし頂上直下で表層雪崩にあい、登頂を断念する。ハルシャマス・サール、ムンガリグ・サール、クズ・サールの三方向から観察すると、シュイジェラブ氷河流域においては6,000m以上の山は6座を数え

た。

「シュウェルト氷河流域」

私達はシュウェルト氷河舌端近くまで入った。それとムンガリグ・サール、シムシャール・パスとクズ・サールからも観察した。

シプトン隊がカラコルム北面を調査した際、シュウェルト氷河の東側を地図上に表している。シムシャール峠は4,735m、私達の測定は4,796mであり61mの高度差がある。そしてシュウェルト氷河出合い、左岸のピークを6,130mと測量し、ムンガリグ・サールを6,050mとしている。私達は6,034mと測定した。これも16mの差がある。

シュウェルト氷河出合いは広いモレーンで氷河舌端が分りにくい。主流が長く延び、左右から支流が入り、主流上部には高い山がなく、最後はオプラン側から延びた氷河と繋がるのでは、と推測する。

今までの地図では6,000m台の山に囲まれ扇状氷河で表わしている。6,400mと表記された山もあるが、ムンガリグ・サールから見ると少し高すぎるように見える。私達は一番高い所で東シュイジェラブとの交差するピークを約6,150mとした。このピークを登れば、シュウェルト、シュイジェラブ両氷河の様子がもっと詳しく解明することが出来ると思う。

「その他の氷河」

私達はガンジ・イ・タンには入っていない。今までの記録もない。したがって未知の領域である。また私達はクルドピン氷河からクルドピン・パスに登り、チョト・ペルト山群南面などを見ておきたかったが、天候や時間的に余裕がなく、クルドピン氷河東西の分岐点で断念した。マイ・ドゥールは今までの地図より、西に長く伸びる草原の谷である。今後オプラン川の南西面のギョルジェラブ・イ・ドゥール流域及びコシ・イ・ドゥール流域などが解禁されればシュイジェラブ山群の北面が解明できる。

6. カムカルテ制作にあたって

カムカルテ(線図で表す地図)製作に当たっては、宮森常雄氏所蔵の資料と、今回の踏査隊の記録と写真をつき合わせて作図した。同氏の協力と

▼チョト・ベルト・サール (5,950m) の北壁



▼クズ・サールから眺めたシュイジェラブ氷河



▲ムンガリク・サールとシュウェルト氷河

▼ザルド・イ・ガル川流域、ボエサム峠と無名峰



▼ジョイ・ドゥールの東氷河（左）と西氷河（右）



▲源流の左から5,930m峰、ジョイ・ドゥール・サール、ジョイ・デスト・サール



▲東クルドビン氷河（左）と西クルドビン氷河（右）の合流点

指導、およびこの山域についての呼称他色々アドバイスを頂いた雁部貞夫氏に深く感謝します。私達の調査記録の間違いが無いとして、チョト・ペルト山群、シュイジェラーブ流域、シュウェルト流域のカムカルテは完成したと思っている。

シムシャール流域は、まだ人知れず謎を秘めた領域である。未知を求める人達に興味をそそせる魅力が多く残されている。

観測点	北緯	東経	標高
シムシャール川出合	N 36° 28' 52"	E 74° 53' 36"	2,525 m
パミール・イ・タン出合	N 36° 25' 24"	E 75° 22' 44"	3,153 m
マイドゥール出合	N 36° 27' 43"	E 75° 27' 29"	3,762 m
チョト・ペルト・ナラ出合	N 36° 28' 02"	E 75° 31' 48"	4,001 m
ガンジ・イ・タン出合	N 36° 28' 14"	E 75° 33' 38"	4,042 m
シュイジェラーブ	N 36° 28' 12"	E 75° 37' 52"	4,381 m
ジョイ・ドゥール出合	N 36° 27' 03"	E 75° 40' 05"	4,703 m
シムシャール峠	N 36° 25' 48"	E 75° 41' 06"	4,769 m
ムンガリグ・サール	N 36° 28' 14"	E 75° 41' 12"	6,034 m
クズ・サール	N 36° 26' 58"	E 75° 38' 29"	5,500 m
ハルシャマス・サール	N 36° 28' 28"	E 75° 28' 56"	5,836 m
シュポデン・ピル (峠)	N 36° 31' 18"	E 75° 21' 39"	5,356 m
ボエサム・ピル (峠)	N 36° 32' 41"	E 75° 20' 28"	5,037 m
クルドピン氷河出合	N 36° 20' 38"	E 75° 27' 15"	3,563 m
W・Eクルドピン合流点	N 36° 09' 49"	E 75° 31' 51"	4,268 m
他に谷の合流点、氷河舌端等、またクルドピン氷河の下流部など34ヶ所を測定し、地図上に反映させましたので記載しません。(作成：亀井 正)			

参考文献

地図 「Exploration in the Karakoram」 By Ph C Visser G・J・D 1926年
「karakoram and Aghil Mountains」 M Spender and colleagues 1937年
「karakoram」 J Wala Swiss 1990年
「カラコルム・ヒンズークシュ登山地図」 宮森常雄 ナカニシヤ出版 2001年
文献 「カラコルム・ヒンズークシュ山岳研究」 宮森常雄・雁部貞夫 ナカニシヤ出版 2001年
「世界山岳地図集成(カラコルム・ヒンズークシュ編)」 吉沢一郎他編 学習研究社 1978年
「地図の空白部」 E. シプトン著 諏訪多栄蔵訳 あかね書房 1967年
「カラコルム登山史」 G. ダイネッリ著 川島英昭訳 あかね書房 1970年
「カラコルム探険史」 S. ヘディン著 雁部貞夫訳 白水社 1980年

「ヒマラヤ」 K. メイスン著 田辺主計・望月達夫訳 白水社 1975年
「カラコルムを越えて」 K. ヤング・ハズバンド著 石一郎訳 白水社 1966年
「未知のカラコルム」 R. C. F. ショーンバーグ著 志摩碌郎訳 生活社 1942年
「ヒスパー山塊の研究」 J. ワラ著 吉沢一郎訳 (岩と雪44号 1975年)
「ヒンズークシュ・カラコルム登山探険誌：田中栄蔵古希記念文集Ⅱ」 高木泰夫編 1980年
「西藏 探険の世紀」 金子民雄著 岩波書店 2002年
写真 井上重治 「Chot Pert周辺」 PIAより空撮

[本稿は、横浜山岳会・創立70周年記念誌「未知を求めて」から著者の了解により転載した]

ロー・マンタンの空、遥かなり(15)

カリガンダキ左岸の地図の空白部に行く

タンゲ村から第1デポキャンプ

高橋 照

タンゲ村で馬を借りた私は、5月7日午前8時半にタンゲのキャンプ地を後にした。荷物は昨日と今日に亘り荷上げを開始したが、まだ二日分位の荷物が残っていた。TBSのスタッフは、もう一日タンゲ村の録画撮りをやりたいというので、金子さんを含み、4人がタンゲ村の泊り場に残ることになった。

私達は村人達が話してくれた情報をもとに、タンゲ・コーラの河沿いにルートをとった。河岸段丘の下についている石ころ道を少し進むと、真黒い泥の塊のような斜面に出た。海底の泥なので粒子は極めて細かく乾燥しているので、アスファルト道路のように斜面は堅い。この黒い土の斜面にはカラガナも育っていなかった。ところどころ黒い谷に白い条が走っていたが、これは全部塩なのである。塩の条は堅く、ピッケルでもなかなかこ

われない。幾段にもなっている黒い道を登って行くのだが、15分も歩くとタンゲ村の馬子である少年がすぐ休んでしまう。

「どうしたんだい」と聞くと、

「昨日、夜遅くまでチャンを飲み過ぎましたので、頭が割れるように痛いんです」

「ははあ、二日酔だな」と私が言ったが、日本語なので相手には全く通じない。子供の二日酔に私は生まれて初めてお目にかかった。

3、40分程登ると右手に大きな沢が入って来ており、谷の合流点附近は大きなゴルジュになっていた。タンゲ・コーラの本流である。陰悪で遡行は全く不可能な谷である。道はタンゲ・コーラに下りずに谷沿いに真直ぐ上に延びていた。やがて谷の水もなくなり小さな雨裂谷になる辺りより、小さな黒土の尾根にと変わって来た。ふと足元を



◀ タンゲの河岸段丘やヤク・コーラの河岸段丘をふかんする

見下ろすと、あるわ、あるわ、アンモナイトの化石がゴロゴロ黒土の各所に現れ出して来た。隊員達は自分達の荷物が重くなるのも忘れて、辺りを物色して歩いた。タシなどは直径20センチ以上もある、完全な形のままのアンモナイトを拾い、いままですぐ集めた小さなアンモナイトの破片を捨ててのほどであった。

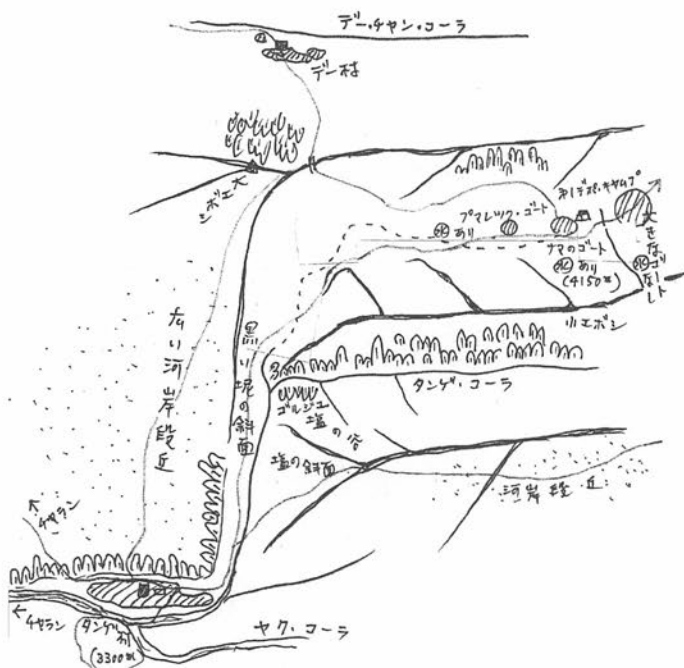
ふと後ろを振り向くと、タンゲの広い河岸段丘も足元に広がり、ヤク・コーラ対岸の二日前に通った、あの長い長い河岸段丘も目の下になり、その背後には中天高く、ドゥラギリ主峰や、ドルボの雪山が聳え立っていた。小尾根につけられた道は、右に、右にと、私達が名付けた小エボシの尾根の裏側に入り込んでいた。もうヤク・コーラの河岸段丘も見えなくなり、ただ広いタンゲの河岸段丘も遥か下になり、対斜面の大エボシの尾根の山腹には、タンゲよりデーに行く道が望見出来た。大エボシの裏側（北側）にはデー・チャン・コーラが、チャランまで流れ落ちているはずである。そのデー・チャン・コーラのほとりにデーの村がある。おそらく、ここから1時間もあれば、デーの村に達することが出来るだろう。デーは地図上（サーヴェイ・オブ・インディアの1インチ1マイル）ではテー（Teh）と記載されている村で、土地の人達はDhyeと発音しているので、この方が正しいのだろう。又、デー・チャン・コーラのチャン（Chang）はチベット語のチュ（Chu）と同意語で、水又は川を意味する。ケサン氏がいないので判らないが、おそらくチュウのロー方言がチャンなのかも知れない。したがって、デー・チャン・コーラはネパール人の呼称で、デー・チャンだけの呼称が正しいと思う。

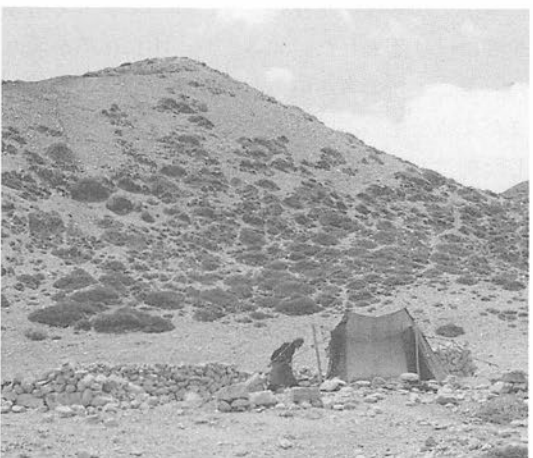
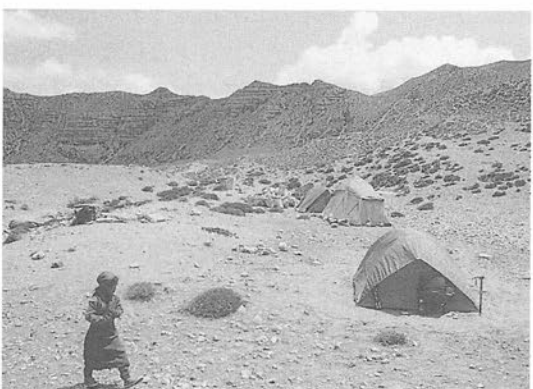
小尾根につけられた道はやがて砂と礫の広い尾根道となり、カラガナがところどころ現れ始めた。そして、平らな台地に出たところは一面の草原で、土地の人はプマラック・ゴート（Pumallak Goth）と呼んでいた。ゴート（Goth）とはネパール語で牧

草地を意味している。ここはゴートとしては小さな草原だが、遊牧民の天幕が一つ張ってあって、一匹の大きなチベット犬が放牧されている山羊達を守っていた。タシはミルクを飲んで来るといって、道からそれて天幕に向かって行ったが、不思議なことにチベット犬はちっとも吠えない。むしろ馬上の私の方に向かって吠え出した。やはりタシにはチベット人の体臭があるのかも知れない。

この小さなゴートを通り過ぎると道は雨裂谷の中や山腹を巻く道となり、傾斜も急になってくる。昨日偵察に出た佐久間が、明日の道は馬では無理ですよといていたが、この辺りのことをいってるのかも知れない。山腹のいたるところに雨裂（多分雪解けの水が削ったものと思う）の溝があり、深さ2メートルから5メートル位で、幅も1メートルから2メートル位あった。そんな道を馬は器用に、溝の中を行ったり、浅いところはそのまま飛び越えるようにして渡った。結局馬から降りねばならない溝は2ヶ所しかなかった。その中砂と礫の斜面はいよいよ急になり、岩盤が現れ、岩の上を水がチョロチョロ流れている地点に来た。馬方の少年は、ここは落石が多いから馬から降りてくれといって、手綱をとって別の道を登り出し、

タンゲよりデーのゴートまでルート図 24日デー村への道





私には左側の小さな岩尾根を登るようににと言っ
て、どんどん先に行ってしまった。あえぎあえぎ
急な岩尾根を登り切ると、眼前には小さな草原が
現れ、水を湛えた小さな池が三つほど点在してい
た。これがナマ・ゴート(Nama Goth)である。
池の周辺には白い馬が5、6頭と山羊の群れが草
を喰んでいた。池のある草原より一息上ると、そ
こは台地になっていて、偵察隊の天幕が1張り、と
荷物が10個程積まれていたが、偵察に出ているの
か、天幕には人の影はなかった。ナマ・ゴートの
高度は一応4,150mと記録した。

天幕より100メートル程先に遊牧民の天幕が1
つ張っており、この中には夫婦と子供が4人住ん
でおり、子供達は皆山羊の見張りをやっていた。
ここにも大きなチベット犬が一匹飼われていた。
天幕の広さは畳三枚分ぐらいで、天幕の奥には仏
壇が設けられ、真中には石で囲った小さな囲炉裏
が一つ拵えられていた。ボテの遊牧民夫婦は20頭
ぐらいのヤクと200頭程の山羊を持っており、飼
いならした野生馬5、6頭を持っていた。家はデー
村にあるが、雪の多い冬期だけ村に帰ると言って
いた。

私は馬で来たので、ナマのゴートまで3時間た
らずで到達したが、歩いて来るポーターや隊員達
には、4、5時間の距離である。今日からはボカ
ラ・ポーターを全員帰しているののでシェルパ・ポ
ーターとタンゲ村から助役を入れて数名雇い入れた。
全くの未知のルートなので、タンゲ村のボテを雇
い入れたのは正解だった。しかし、彼等にブリク
ティは何処にあるのかと聞いてみると誰もそんな
山の存在は知っていなかった。ただ、この奥にあ
るナッカリ・ダモダール・クンダという聖地の奥
に、雪を頂いたヒマールがあるということだけは
知っていた。そして、ナッカリ・ダモダール・ク
ンダの奥へデー・チャンを遡って行くと、サッカ
リ・ダモダール・クンダという聖地があって、そ
の先はチベットの高原に続いているそうである。
ダモダール・クンダのクンダ又はクンドは「聖な
る池のあるところ」というネパール語である。だ
からダモダール・クンダはダモダールの聖地とい
うように表現したら良いだろう。ところが、ダモ
ダール・クンダの上につく、ナッカリとかサッカ

リとはどういう意味があるのだろうか。ナッカリ(Nakkali)とは“嘘の”とか“ニセ物の”という意味でサッカリ(Sakkali)とは“本当の”とか“本物の”という意味のネパール語である。だからナッカリ・ダモダール・クンダとは「ニセ物のダモダールの聖地」ということになり、サッカリ・ダモダール・クンダとは、「本物のダモダールの聖地」ということになるわけである。また、ダモダール・ヒマールの私達の登山目標の山である「ブリクティ」(Bhrikuti)とはどういう意味を持っている名称なのだろうか。

カトマンドゥの東の方の郊外の山の上に、ネパールで最も古いお寺と言われているチャングナラヤン寺(Changunarayan Mandir)という立派なお寺がある。カトマンドゥの郊外にあるので余り観光客は行かないようであるが、ここにある石像は全部8世紀、9世紀のもので、ネパールの国宝ともいべき石像である。このお寺は、西暦880年にリッチャビ王朝初代の王アンスー・ヴァルマ(Ansu Varma)と二代目のラージュ・マン・デーヴ(Raj Man Dev)によって建立されたものである。この時代には今のカトマンドゥもバクタブルも無かった時代で、リッチャビ王朝の主都は今のインドのティストゥング(Tistung)に近いところにあって、今のネパールは当然リッチャビ王朝の支配下にあった訳である。私達の良く知っているマッラ王朝(ネワール王朝)はその後に出て来て、バクタブルを主都とし、その後カトマンドゥを主都としたことは周知のことである。

実はリッチャビ王朝初代の王、アンスー・ヴァルマの娘が「ブリクティ」なのである。当時チベットに勢力を張っていた有力な王に、ナムリ・スラング・ブツォ(Namri Srang Btso)という人がいた。王女ブリクティはその王との政略結婚で、7世紀の前半に暑いインド(ネパール)からヒマラヤを越えてチベットに嫁いだという話が残っている。チャングナラヤンの本堂の前にある、ブラフミー文字の彫られた古い碑文には、あるいはブリクティ姫のことが残されているかも知れない。

以上はネパールよりチベットに降嫁したアンスー・ヴァルマの王女ブリクティについてのネパールにおける伝説の概要であるが、チベットに降嫁した

ブリクティ妃をチベットの歴史から見るのも大変興味があることであろう。チベットには歴史上彼女の業績を裏付けるいくつかの史実や、彼女の建立したチベットで最も有名な寺院が今なおラサに残っている。このことは、今回同行した大正大学の金子さんより天幕の中でうかがったり、その後ブリクティ妃についてのその時代のチベット史の資料をいただいた中よりと、下山後カトマンドゥで断片的ではあるが、ケサン・ナムギャル氏に彼の自宅で聞いた話などの概要を抜粋してみることにしよう。

7世紀前半にチベットを平定した吐蕃王国の始祖ソンツェン・ガンボ王は、ネパールの王女ティツウンと唐の太宗の王女文成公主の二人を妃に迎えた。この吐蕃王国の始祖ソンツェン・ガンボがネパール側の口伝に残っているナムリ・スラング・ブツォなのである。実はこのティツウンが、ネパールのリッチャビ王朝初代のアンスー・ヴァルマ王の王女ブリクティなのである。ティツウンはブリクティのチベット名である。ティツウンも文成公主も二人とも熱心な仏教信者であった。そのうち、ネパール王妃のティツウンは仏教の寺院を建てようと思ったって、文成公主に寺院建立のための占筮してもらった。ところが、使いの者が文成公主の占断を十分に伝えなかったので、予定地のオタン湖を埋め立てることが出来なかった。ティツウン王妃は反って文成公主に反感を持ち、王にも黙って基礎を作らせたが、占いにしなかったため、悪魔に破壊されてしまったのである。そこで、ティツウン王妃は王に相談したところ、王は事情を知らないふりをして、験力によって指輪を湖に投げ落とした。すると湖の中に仏塔が現れた。そこで皆の者が協力して湖を埋め立てたが、まだ文成公主の占いにしなかったもので、建立した御堂も結局悪魔に破壊されてしまった。そしてその時、文成公主の占いの結果が王の耳に入っていたので、王は7日の修法を行ったところ、御堂が見事に完成したと言うのである。

この御堂がチョカンといって、チベット仏教の根本仏堂として人々の信仰の中心であるトゥルナン・ツクラカン(トゥルナン寺)の通称である。中国名では大昭寺といって、河口慧海の「西藏旅行



記」にも出てくるラサ最大のお寺である。

このトゥルナン寺を建立したネパール王妃のティツウンは、チベットの所伝ではネパールのアムシュヴァルマ(ネパール名Ansu Varma)王の娘と伝えられ、またやや後のナレンドラ・デヴァ(Narendra Deva)王の娘とも推定されるが、名前はブリクティ(チベット名ティツウン)という。ブリクティ(ティツウン)は白ターラーの化身とされ、文成公主は緑のターラーの化身といわれる。そのティツウン妃と文成公主が協力して、650年頃にソンツェン・ガンボ王(649年没)の菩提供養と顕彰のために、トゥルナン寺を建てたようである。トゥルナン寺の門はティツウン妃の故郷ネパールの方向の西を向いており、また寺院そのものはネパールの職人の手によって建てられたといわれている。古い部分は、堂の配置などを見るとベナレスの寺院跡やサンチの寺院廃墟に類似しているようだ。

又、トゥルナン寺にある弥勒法輪堂(チャンパ・チエコル・ラカン)には、昔ネパール妃ティツウンがチベットに嫁ぐ途中、水害に出遭い、その時父のアンサー・ヴァルマ王から授けられた弥勒法輪が光を放って王妃一行の前進を可能にしたということから、王妃は後にこのチョカンを建立した時、この響銅製の弥勒法輪をここに祀った。その

後ネパール妃ティツウンと中国妃文成公主は、それぞれの故国から多くの有能な技術者を呼び寄せて、トゥルナン寺の上階を造り、さらにラモチェ寺を建立した。

ティツウン妃と文成公主がチベット降嫁したことは、ラサの町の形成過程において、政治、経済、文化面にわたる多大な利益をもたらした。その証拠には、千数百年を経た今でも多くの事跡を見ることが出来る。

後代のチベット人は、ポタラ宮殿の上方に位置する「法王瞑想洞」の中に、法王ソンツェン・ガンボ、中国妃文成公主、ネパール妃ティツウンその他の息づくような像を安置した。これらは現在でもチベット史の特別な事蹟となっている。

このナマのゴートからは、ムスタン・ヒマールが一望の中に眺められた。山の名前は分からないがなだらかな山容で、大体4,500m以上は真白な雪で覆われ、かなり大きな氷河も望見出来た。その緩やかな山裾は、チベットに向けて高原台地となって延びていた。私は5年前、ロー・マンタン手前にある、タング・ルングより双耳峯の灰色の丘を平原彼方に眺めたことがある。隊商を率いていた馬方のアルジュングが、あの灰色の丘を越えたところにロー・マンタンがあると教えられたことを思い出した。ムスタン・ヒマールの山裾を目

で追って行くと、広く長いグリーンのスロープがあった。そしてその左下に、まぎれもない灰色の双耳峯の丘が小さく、小さく眺められた。そうすると、あの広くて長いグリーンのスロープが、ロー・マントンの耕作地なのだ。直線距離にして10キロ以内と思われた。灰色の丘より左には赤褐色の平らな河岸段丘が延びていた。タング・ルングのゴートは王室の放牧地である。私はタング・ルングは尾根が高原状に広がったところだと思っていたが、こうして、カリガンダキの対斜面、しかもロー・マントンより1000m近くも高いところから眺めて見て、タング・ルングの高原が、実はカリガンダキの河岸段丘の一部であることが判った。そして、タング・ルングより左のチャランの方に目を転じると、カリガンダキ右岸の岩壁が低い尾根のようになってチャランまで延びていた。ムスタン街道はこの尾根の向う側に水平につけられていた。

チャランの集落は肉眼ではとても見えなかったが、チャランの城郭都市と思われるあたりに深い谷がカリガンダキにそそぎ込んでいるのが判った。そうすると、その辺りにブリクティより流れ落ちるデー・チャン・コーラがカリガンダキに落ち込んでいるわけである。地図上ではそこが十字峽になっているので、タンゲ村でケサン氏に聞いたとき、

「えー、たしかにそうですよ。両方の谷がカリガンダキで完全にクロスしてますよ。高橋さんは良くそんなことまで知っていますね」といわれたことがあった。今、ここから眺めるチャランの広大な河岸段丘の耕地は、グリーン一色であった。5年前に私がチャランを通った時は、耕地一面がダッタン・ソバの花盛りで、見渡すかぎりピンク色のカーペットを敷きつめたようになっており、その間に、ところどころ実をたわわにつけた小麦が、黄金色に広がっていたことを思い出した。今年のロー地方の作付けはソバや小麦でなく、ほとんどが大麦なのかも知れない。

ナマのゴートの水場のある草原には、日当たりの良いことも原因しているのだろうが、ビャクシンの小木があって、少しばかり緑の斜面を作り出していた。そして、その他は瓦礫の斜面にカラガナの丸い塊が広がり、その間をヤクや山羊が草を

求めて点在しているまことになごやかな風景であった。

ゴートより右の方(北)は荒々しい岩肌の長い尾根が大エボシの方に続いており、大エボシ手前の鞍部まで、ナマのゴートより水平道が延びていた。この水平道を行き、鞍部よりデー・チャン・コーラに下れば、そこにはデーの村がある。それより道はヤラの村を通り、カリガンダキを渡ってドリーの集落を過ぎ、タング・ルングを通してロー・マントンまで続いているカリガンダキ左岸の間道があるのだ。

今、私達はその間道の核心部にいるわけである。

この日、偵察隊は私達の名付けたドロミテ岩峯の下を左にトラバースして、ドロミテ岩峯より続くロック・バンドの延びる尾根の一角を越えて、デー・チャン・コーラ側に入り、その先にある鋸の大窓のような地形のウルペガック(Urpegak 4,600m)まで進出したのである。そして、タシ・ザンブーはウルペガック付近の5,210m峰に登り、別のルートを下降して、ナマの仮の第一デポ・キャンプに戻って来たのである。その夜は偵察隊各自の情報を集めて、この未知の地域の地図上の空白地帯の地図を作製したのであった。

■財政支援〔11万円〕岩崎洋、美津子
〔5万円〕辻野健治、治子
〔2万円〕同人パハール
〔1万5千円〕出口當

東京集会のお知らせ

日時 10月27日(月)午後7時～
内容 イエティのこと
場所 H A J ルーム(地下鉄有楽町線東池袋下車4番出口から地上に出て右へ徒歩2分)
又は、J R大塚駅下車、都電荒川線の早稲田方面2つ目の東池袋4丁目下車、前方で右に折れて地下鉄出口から徒歩2分)

1929年の「ルーズベルト地図」

高倉 忠博（元大学教授）

前置きが少々長いが御辛抱頂きたい。

1世紀前、日本は満洲の權益をめぐる帝政ロシアと緊迫した関係にあり、明治37年(1904)遂に日露戦争が始まった。その結果は周知のことであるが、日露ポーツマス条約(1905)締結に仲介の労を執ったのが第26代米国大統領テオドル・ルーズベルト(1858-1919、原音はスィアドア・ロウゼヴェルトに近い)であった。大統領は大型獣の狩猟を好み、その為政治漫画ではムース(オオシカ)に似せた似顔がよく使われた。その子息スィアドア Jr.(1887-1944)とカーミット(1889-1943)も父の狩猟の旅に何度か同行し、父を超えて動物学者の域に達した。

さて、今でこそ世界的珍獣ジャイアント・パンダは保護の対象となり、WWF(世界野生生物基金)のシンボルマークにもなっているが、20世紀初頭から第二次世界大戦寸前までは欧米のハンター達が競って清国-中華民国の西南部、特に四川省を訪れており、標本がある程度行きわたると生体の捕獲に重点を移した経緯がある。

ルーズベルト兄弟もスポンサーを得て、1928年(昭3)にNYを出発、船でロンドンに向かい、フランスを経て海路ビルマに着き、雲南省を経由して四川省の打箭炉ターチエンルー(現在の康定)カンティンに達した。ここから周辺の穆坪ムーピン(現在の宝興)パオシン附近を探索したが、パンダの出没は噂の域を出ず、遂に往路と山脈を隔てた東側のルートで雲南府(昆明)ユンナンフーを目指す途中、幸運にも雄の成獣一頭を仕留め、毛皮と骨骼その他の標本を持ち帰ることが出来た。この旅行記は早くも1929年中に「トレイリング・ザ・ジャイアント・パンダ(パンダを逐って)」と題する兄弟の共著として出版された。この本の折り込み地図が本稿のテーマである。

この書物は夙に日本の識者に知られてはいたが、なぜか翻訳されなかったようだ。当時はパンダの知名度も低く、何より日本人の関与がなかったことが一般人向きのトピックにならない、と考えら

れたのではないか。そして戦後30年近く経って漸く日本にもパンダ・ブームが訪れ、現在に及んでいる。しかし、自然保護重視の時代、この珍獣を銃の標的にした話など世情に合わないと思われたのか、ブーム到来以後も翻訳されていない。

先年、私は地図つきの原著を入手した。考えてみると、旅行ブームの現在、四川・雲南の奥地にも一般の関心が高まり、昔は昔、今は今と割り切る人も多くなったのではないか。若しそうなら同書も翻訳に価すると思ひ、著者一行のキャラバンキャラバンの歩みよろしく、ポツポツと訳している最中である。私も原著を何度か読み返すうち、たとえばほんの一部であっても著者一行の辿ったルートを眺めてみたいと思ひ始めた。そして短いバス旅行ではあったが、大理-麗江タリーと雅安リチアン(昔の雅州)ヤアン-康定ヤチョフを訪れ、山なみや河川の配置などを実見した。

さて1929年当時は中華民国成立(1911)より20年もたたず、四川・雲南両省の大部分は匪賊が横行し、民国政府の禁止令にも拘わらず辺境では阿片吸引が盛行するなど、一種の無法地帯であった。ルーズベルト兄弟一行が無事に旅を終えたのは十分な人数と武器の準備があったからと思われるが、欧米のプラント・ハンター達と同じく、一行も内陸に進出していた仏・英・米の宣教師たちに一時の休息やその他の便宜を受けつつ、困難な旅を続けたのである。

本稿は同書の紹介が目的ではないが、四川・雲南へのツーリズムが一般化した現在、一行のルートを「簡介」し、地図と旅程表により、70余年前の地名と現在のそれらを比定するのも一興と思ひ、資料を提供する次第である。ただし地図は中核部のみを示した。ルーズベルト兄弟も述べているが、出発前に米・欧で最新詳細地図を入手して携行したのに、先人の示した地名には屢々信頼のおけぬ例があったという。距離、位置関係、山河の配置の不確かさに加え、現地に行ってみると誰も知らないとか、全く意味をなさない地名にも悩まされ

た由である。

現在でも中華人民共和国成立(1949)以後に旧地名が改められたり忘れられたり、逆に新地名が生じたりと、新旧の比較は容易ではない。私が初めて四川の団体旅行に参加した折、若いガイドは樂山市の旧名が嘉定(府)であると即答できず、土地の住民に確かめたこともあった。また、四川省中西部チベット寄りの一部が、一時期西康省と呼ばれた(1928-1955)ことも、必ずしも若い世代の現地住民の常識にはなっていないようであった。

読者諸賢には定めしヒマラヤと謂わば地続きの四川・雲南に詳しい方も多いことと思われる。お暇の折に前述のごとく、ルーズベルト地図上の多くの地名が現在のどこ(の附近)かを比定して御覧になっては如何であろうか。蛇足ながら、一行の帰途の安寧河沿いのルートは一部成昆鉄道に近接している。

紙面の都合上、旅程表は騰越(=騰冲)から四

川省を経て雲南府(=昆明)までとし、里程のマイルは1.6km、高度は1呎を0.3mで換算した。

再録したローマ字綴りの地名は表記が統一されておらず、南の方言を反映するものもある。(例街=kai 江=kiang 橋=kiaoなど)。原著旅程表の説明では、ローマ字地名は1) 1921年上海出版のPostal Guide of Chinaと2) 1926年英国陸軍省作成の400万分の1アジア地図を参考にし、記載のない地名は同行の通訳Jack Young(民国系米人)の採録を使用した由である。

なお、兄弟は昆明から滇越鉄道に乗り、仏領インドシナのパノイへ向かった。

旅 程

(原著にはポルトガル語のROTEIROを使用)

Bhamo (バーモ) 発 1928年12月6日236.8km

Tengyueh (騰越) 着 1929年1月3日。

Tengyueh 発 1月5日 27.2km Kalanchai (標高1,590m、途中の峠2,430m) 着。以下251kmで1月17日Talifu (大理府) 着。

The Chinese Government made recently a new province out of Western Szechuan called SIKANG with the capital Kangting (new name of Kiating) Most of the route of the Expedition lies within this new province.

左の(new name of Kiating)は嘉定(=樂山)の勘違い。嘉定は終始、四川省。



月 日	出發地	距離	到 着 地			
1 月 20 日	Talifu	35.2	Tengchwan(鄧川)	7 日	25.6	Waszekow(瓦斯溝)
21 日	Tengchwan	35.2	Niukai(牛街)	8 日	Waszekow 28.8	Lutingkiao(瀘定橋 1,440m)
22 日	Niukai	28.8	Tienwai	9 日	Lutingkiao 40.0	宿屋(1,920m 峠 3,150m)
23 日	Tienwai	35.2	Paochiao	10 日	24.0	Schwi Taping (1,320m)
24 日	Paochiao	28.8	Likiang(麗江)	11 日	Schwi Taping	Shinshitau (峠2,040m)
26 日	Likiang	24.0	野營		25.6	
27 日		12.8	野營	12 日	Shinshitau 27.2	Tienchuan (天全 840m)
28 日		24.0	野營(3,150m)	13 日	Tienchuan 43.2	Lingkwan(750m)
29 日		28.8	野營(3,090m)	14 日	Lingkwan 24.0	Muping(穆坪=寶興 1,050m)
30 日		24.0	野營(3,660m)	16 日	Muping 27.2	Kaiyang(1,350m)
31 日		25.6	Fenkow(1,830m)	18 日	Kaiyang 22.4	野營(2,010m)
2 月 1 日	Fenkow	25.6	小屋(3,075m)	19 日	9.6	Luchingsha(2,400m)
2 日		32.0	Yungning(永寧・ 2,850m、峠3,690m)	26 日	Luchingsha 32.0	Muping 燐着
5 日	Yungning	22.4	Lijudsa	27 日	Muping 24.0	Lingkwan
6 日	Lijudsa	22.4	Gibboh Mountain (野營)	28 日	Lingkwan 25.6	Lushan(芦山)
7 日	Gibboh	33.6	Muli(木里)	29 日	Lushan 35.2	Yachow(雅安=雅安 720m)②
9 日	Muli	25.6	Shikang(3,600m)	30 日	Yachow 28.8	Maliuchang
10 日	Shikang	28.8	Yuanhsueh(3,840m)	31 日	Maliuchang 30.4	Wanglipu(1,200m)
11 日	Yuanhsueh	24.0	Taiye(4,440m)	4 月 1 日	Wanglipu 28.8	Tsingkihsien(清溪 県、峠2,880m)
12 日	Taiye	22.4	Nokchu(4,320m)	2 日	Tsingkihsien	Fulin(富林 810m)
13 日	Nokchu	32.0	Reddu(3,690m)		32.0	
14 日	Reddu	12.8	Metilong(2,250m)	3 日	Fulin 27.2	Susimbah
15 日	Metilong	9.6	Erh Ar(2,820m)	4 日	Susimbah 33.6	Tzetati(現・石棉)
16 日	Erh Ar	30.4	Bedung(峠5,250m)	5 日	Tzetati 11.2	Sinchang
17 日	Bedung	27.2	Paumong(3,150m)	6 日	Sinchang 19.2	Tsalo
18 日	Paumong	32.0	野營(4,200m)	7 日	Tsalo 16.0	Kooing Ma
19 日		24.0	Kymo(峠4,800m)	8 日	Kooing Ma 12.8	Kooing Hai
20 日	Kymo	4.8	Chiulung(九竜)①	9 日	Kooing Hai 25.6	Litzapin(栗子坪)③
21 日	Chiulung	9.6	Wupaoni(4,020m)	12 日	Litzaping 22.4	Yehli(冶勒)④
22 日	Wupaoni	28.8	Erh Tar	16 日	Yehli 38.4	Tachow
23 日	Erh Tar	30.4	Sambagah(4,080m)	17 日	Tachow 51.2	Lokow(瀘沽)⑤
24 日	Sambagah	32.0	野營(4,320m)	18 日	Lokow 51.2	Ningyuan (寧遠 現・西昌)
25 日		48.0	野營	22 日	Ningyuan 38.4	Hwangshuitang (黃水塘)
26 日		25.6	Tatsienlu (打箭炉=康定)			
3 月 1 日	Tatsienlu	16.0	村落			
2 日		19.2	Dzongju			
4 日	Dzongju	35.2	Tatsienlu 帰着			
6 日	Tatsienlu	8.0	宿屋			

23日	Hwangshuitang	Hsiaokaochiao(小 36.8 高橋)
24日	Hsiaokaochiao	Kungtuying(1,290m) 40.0
25日	Kungtuying	36.8 Paikuowan(2,160m)
26日	Paikuowan	33.6 Hweilichow(会理州)
27日	Hweilichow	48.0 Tsalashu
29日	Tsalashu	38.4 Tsibanlo(2,340m)
30日	Tsibanlo	40.0 Lohaitan(2,100m)
5月1日	Lohaitan	52.8 Shimahlungkai (市馬竜街)
2日	Shimahlungkai	Fumin(富民)より 54.4 8 km先の村
3日		33.6 Yunnanfu(雲南府=昆明)

(註)

- ①本文、地図ともChui-とあるがChiu(九)。
- ②地図でYachowのすぐ南にJungkingとあるのは、漢字「栄経」を「栄経」と誤読したもの。ピンインではYingjing。
- ③栗子坪の子をtzaと綴ってあるが、標準音ではtzeとあるべきもの。恐らく方言音であろう。
- ④地図にはYehliと書いてあるが、本文と索引にはYelhiが現れる。「冶勒」は標準音ではYele、イエーロー。
- ⑤ここから約100kmは安寧河に沿って南下するが、地図ではAmningの綴りが見える。正しくはmでなくnであろう。

HIMALAYA NEWS

地域ニュース

《インド》

パンチ・チュリで雪崩、11名が遭難

インド・チベット国境警察(ITBP)の発表によるとパンチ・チュリ(6,904m)に派遣したチームが8月29日登頂し下山中、雪崩のため遭難し、メンバー7名と高所ポーター2名が死亡、ヒマラヤ登山経験が豊富でH A JとITBTが合同でカンチェンジュンガ(シッキム側)に挑戦した時のメンバーであるS. D シャルマら2名が行方不明となった。

ヒマラヤから

冬期ローツェ便り

ナマステ!!

私達、冬期ローツェ南壁登山隊に、御声援御協力ありがとうございました。おかげさまで登山隊は9月3日カトマンズ入りし、全員元気に準備活動を行っています。

私達の目標を達するためには、まず8,000mの高みまで駆け登れる体を作らなくてはなりません。夢への第1歩として高所順応トレーニングのため、

これからチベットのシシャパンマ峰(8,027m)へむかいます。気をつけて行ってきます。

9月6日 カトマンズにて 田辺 治

トピックス

H A J 関西集会案内

日時：2003年11月8日(土)10時～

場所：(財)大阪セルロイド会館3F会議室

大阪府岳連ルーム(地下鉄・千日前線・今里駅西7分) どなたでも参加できます。

参加費：1,000円(懇親会参加費は別途2,000円)

内容：

ヒマラヤからバフィン・アイランド 木本 哲
ローツェからエベレスト 東京農大隊
東ネパールを語る 林 雅樹
西ネパールとオープンピーク 大西 保
ヒマラヤ登山の事故防止対策 山森欣一
ヒマラヤ最新情報(パキスタン・岩崎洋、ネパール・野沢井歩、チベット・林孝治)

申し込み：大西保 typhoon@showa-p.co.jp (090-8882-1303)／樋上嘉秀 cav71310@pop21.odn.ne.jp (06-6971-7579)／林雅樹 m_hayashi@muh.biglobe.ne.jp (075-392-9495)

パス一峰遭難事故報告

日本ヒマラヤ協会が、サマー・キャンプとしてパキスタンに派遣した登山隊で遭難事故が発生し、高橋敏雄隊員が死亡した。登山隊による登山と事故の内容については、後日、本誌々上にて報告されるが、概略と収容隊の概略を報告する。

〔事故発生日〕 2003年 8月20日午後12時40分頃

〔遭 難 者〕 高橋敏雄（1958年10月15日生 44歳）

〔死亡月日〕 2003年 8月21日現地時間18時 8分

〔事故原因〕 クレバスへの転落

〔事故と救助活動の概要〕

登山隊はパス一東峰(7,295m)に 8月18日17時20分に登頂。登頂者は、佐藤英樹副隊長、岩崎洋登攀隊長、北條治男、桶川和気夫、石川龍彦、加藤和美、高橋敏雄各隊員の計7名。同日は、下山中の20時に標高6,700m付近にて全員でビバーク。

8月19日

ビバーク地点からC 3 (6,000m)に10時半到着。全員の疲労が激しくC 1へ下降できずこの日はC 3泊まりとなる。

8月20日

積雪30cm、7時にC 3を出発。高橋、加藤、岩崎でロープを結び、佐藤、桶川と石川、北條のパーティ編成で下山。C 2地点の下、標高5,500m付近で先頭の高橋がクレバスに転落(12時40分)した。岩崎、加藤がクレバス内に降りて救助活動を行うが、高橋が落ちた拍子にクレバス内で高橋のワカンを着けた右足が挟まれて抜けない。狭いクレバスなので頭を逆さまにして片手だけしか使えない態勢で、氷を取り除くので作業が捗らない。深夜二人が上がり、佐藤がクレバス内に降りて高橋と会話しながら付き添う。北條、桶川、石川の3名は佐藤を確保しながら一晩中、クレバスの縁でビバークする。

8月21日

降雪とガスの中、朝6時再び岩崎、加藤がクレバス内にて作業を開始し、17時過ぎようやく高橋の足を外すことができた。上に引上げ作業を行い18時過ぎに外に出した。しかし、高橋は皆に会ったのを確認するように18時8分息を引き取った。

8月22日

酒井隊長は事故報告のためBCを出発。下の村にいた連絡官と合流し、グルミットからイスラマバードの日・パトラベル経由で日本の留守本部へ遭難の報告を行う。隊員は仮埋葬しC 1へ下山。

8月23日

隊員はBCへ下山。イスラマバードから高所ポーター2名を救援のため派遣。

8月25日

隊員はBCを撤収し、28日早朝にイスラマバードに到着。

8月28日

佐藤、桶川(PK)、北條、石川、加藤、吉武(TG)で帰国の途につき、29日午後帰国。

〔登山隊の行動概要〕

7月18日 佐藤、岩崎、桶川、高橋がパキスタン航空(PK)で出発。イスラマバード入り。

7月20日 酒井、北條、石川、加藤、吉武がタイ航空(TG)で出発。(PKキャンセルのため)

7月22日 イスラマバード～ギルギット (バス)

7月23日 ギルギット～パス一 (バス)

7月24日 パス一から10分程戻ったシャルマールからキャラバン開始、26日、4,050m地点にBC建設。28日、第1デポ(4,300m)、8月1日、第2デポ(4,800m)、6日、C 1(4,900m)、7日、第3デポ(5,200m)、8日、仮C 2(5,350m)、10日、第4デポ(5,450m)、15日、C 2(5,600m)、16日、C 3(6,000m)とキャンプを展開。

8月17日 佐藤以下7名で頂上アタックを行ったが天候悪化のためC 3へ戻る。

8月18日 7名で再度頂上アタックを行い主峰を断念し、東峰に向かい7名が登頂に成功したが、帰途ビバークとなった。

〔留守本部と収容隊の概要報告〕

8月23日（土）

午前3時7分、山森理事長宅に寺沢玲子会員からイスラマバードの日・パトラベルからの連絡として遭難の第1報がもたらされた。

山森から高橋夫人に電話連絡するも留守番電話になっており、1時間ほどたって直接夫人に報告。この間、酒井夫人、野沢井歩専務理事、尾形好雄、中川裕常務理事に連絡。天城敏彦評議員に連絡に当たってもらう。

8時、山森H A J ルームに入り、実行委員にF A Xにて連絡。中川裕常務理事、天城評議員、出口當、寺沢会員が来局しサポート。外務省邦人保護課に事故報告、同様に共同通信、時事通信を通して報道各社に通報。高橋夫人、志小田美弘評議員から現地行きの打診あるも保留してもらう。午前中は報道各社からの照会の対応を行う。

15時08分、グルミットの酒井隊長から電話が入る。ギルギット到着次第、高橋夫人へ直接報告するよう依頼。

16時30分、天城評議員と手分けして隊員留守家族へ登頂と遭難事故発生の連絡を行う。

8月28日（木）

高橋夫人、志小田評議員、野沢井専務理事をイスラマバードへ派遣。（T G）

8月29日（金）

寺沢会員を収容隊サポートのためイスラマバードへ派遣。（P K）

8月30日（土）

岩崎、寺沢が高所ポーターを同道して遺体収容のためイスラマバードを出発。

8月31日（日）

遺体収容遅れるため、酒井隊長、高橋夫人、志小田、野沢井帰国。（日本着9月1日・T G）

9月4日（木）

岩崎、高所ポーターは遺体をC 1まで収容。

9月5日（金）

遺体を登山隊B Cに収容。

9月8日（月）

留守本部は、遺体ダビのため、高橋夫人、志小田をイスラマバードに派遣

9月9日（火）

遺体と収容隊はイスラマバードに到着。

9月10日～11日

高橋夫人、岩崎、寺沢、志小田と日本大使館々員立会いの下、ラワルピンディでダビに付す。

9月12日（金）

志小田評議員が一足先に帰国。（P K）

9月15日（月）

高橋夫人、岩崎、寺沢、遺骨と共に帰国。酒井隊長、山森理事長同道し、仙台にてご親族に遭難事故報告。

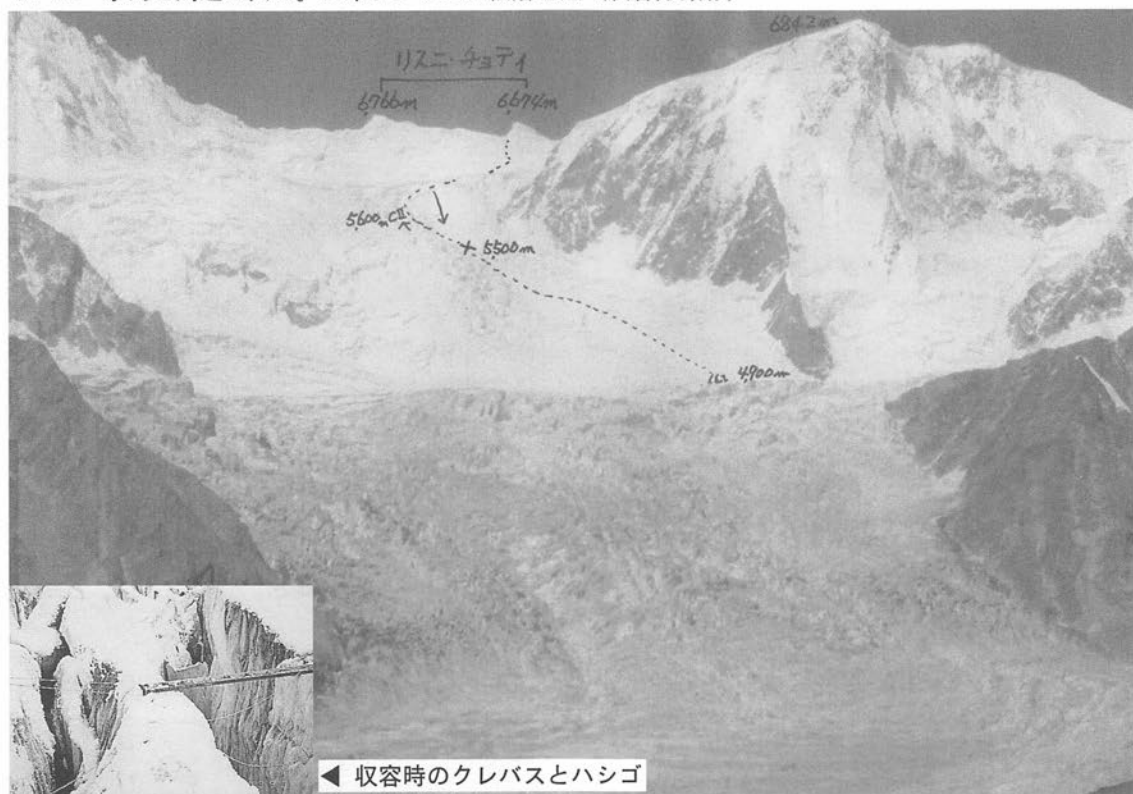
今回の事故に際しては、日・パトラベル、日本大使館、在日パキスタン大使館、金子秀一、T H Iの皆様に大変お世話になりました。この場をお借りして厚く御礼申し上げます。（記：山森）

▼頂上直下、左から加藤、石川、桶川、高橋



▲高橋敏雄隊員が落ちたクレバス。中央の張り出している部分を挟んで、右が転落した箇所。左は救助のために崩した箇所。

▼パサー氷河と周辺の山々。×印がクレバス転落地点（収容隊撮影）



事務局日誌（9月）

- 1日（月） パサー峰事故、高橋夫人、酒井隊長、志小田評議員、野沢井専務理事帰国（TG）山森、酒井夫人出迎え
- 5日（金） パサー収容隊、寺沢から遺体BCへ収容の電話報告入る（23時）
- 8日（月） 高橋夫人、志小田評議員イスラマバードへ出発（山森、酒井夫人見送り）
- 9日（火） ヒマラヤ383号発送
- 12日（金） 志小田評議員帰国（山森、酒井夫人出迎え）
- 13日（土） 日山協共済センターへパサー隊事故報告書郵送
- 15日（月） 高橋夫人、岩崎、寺沢帰国（酒井夫妻、山森、天城夫妻、大神田伊曾美、保坂巖、小林裕美子、小泉太史出迎え）、酒井、山森同道し、仙台で親族に遭難報告。
- 17日（水） 高橋隊員お通夜（於・仙台、パサー隊8名、山森、寺沢、尾形、天城夫

妻、松館、野口ら）

- 18日（木） 高橋隊員告別式（於・仙台、パサー隊8名、山森、寺沢、中川、天城夫妻、松館、保坂、野口ら）
- 19日（金） 高橋夫人、南光学園へパサー事故報告書送付
- 28日（日） 山岳同人 崑 創立20周年記念祝賀会（於・パレスホテル、山森、中岡）
- 29日（月） 東京集会（23名）

ヒマラヤ No.384（11月号）

平成15年10月10日印刷 15年11月1日発行

発行人 山森欣一

編集人 山森欣一

発行所 日本ヒマラヤ協会

〒170-0013 東京都豊島区東池袋4-2-7
萬栄ビル501号

電話 03-3988-8474

郵便振替 00100-6-48954「日本ヒマラヤ協会」

遙かなる高みへ

トレッキング・登山隊の許可取得から航空券・現地手配までお引き受けいたします

～ネパール・インド・ブータン・パキスタン・中国・東南アジア・アフリカ・中南米～



◆格安航空券のご相談は◆

キャラバンデスク

(東京) ☎03(3237)8384 (直通)
(大阪) ☎06(6362)6060 (直通)

トレッキング・海外登山・シルクロード・秘境旅行のバイオニア ■本

社/〒101-0051 東京都千代田区神田神保町2-3-1

株式会社 西遊旅行

国土交通大臣登録旅行業第607号・日本旅行業協会正会員

西遊旅行ホームページ (<http://www.saiyu.co.jp>)

■大阪営業所/〒530-0026

岩波書店アネックス5F
☎03(3237)1391(代) FAX 03(3237)1396

大阪市北区神山町6-4 北川ビル5F
☎06(6367)1391(代) FAX 06(6367)1966

お問い合わせ・お申し込みフリーダイヤル
(通話料無料)をご利用下さい。

☎0120-811395

東京新聞の山岳書 東京新聞出版局

〒100-0011 東京都千代田区内幸町2-1-4 日比谷中ビル6F
TEL: (03) 3595-4830 (代)
<http://www.tokyo-np.co.jp/tbook>

山書散策	登山の運動生理学百科	なんでも百科	新・山靴の音	女性ガイドのしなやか登山術	新山の雑学ノート・第1集	すぐ役立つ中高年の雪山入門	すぐ役立つ山のメモ帖	すぐ役立つ記念日の山に登ろう	すぐ役立つ山の気象と救急法	クライミング技術	山小屋の主人の炉端話	クライミング技術
今まで数多く刊行された山書、何を読んだらよいのか、そんな時の指針として「登山」連載時から好評。	「登山」に年輪はない」と主張する著者が、より安全により快適に登山を楽しむための、中高年登山の虎の巻。	「登山」に年輪はない」と主張する著者が、より安全により快適に登山を楽しむための、中高年登山の虎の巻。	「登山」に年輪はない」と主張する著者が、より安全により快適に登山を楽しむための、中高年登山の虎の巻。	「登山」に年輪はない」と主張する著者が、より安全により快適に登山を楽しむための、中高年登山の虎の巻。	「登山」に年輪はない」と主張する著者が、より安全により快適に登山を楽しむための、中高年登山の虎の巻。	「登山」に年輪はない」と主張する著者が、より安全により快適に登山を楽しむための、中高年登山の虎の巻。	「登山」に年輪はない」と主張する著者が、より安全により快適に登山を楽しむための、中高年登山の虎の巻。	「登山」に年輪はない」と主張する著者が、より安全により快適に登山を楽しむための、中高年登山の虎の巻。	「登山」に年輪はない」と主張する著者が、より安全により快適に登山を楽しむための、中高年登山の虎の巻。	「登山」に年輪はない」と主張する著者が、より安全により快適に登山を楽しむための、中高年登山の虎の巻。	「登山」に年輪はない」と主張する著者が、より安全により快適に登山を楽しむための、中高年登山の虎の巻。	「登山」に年輪はない」と主張する著者が、より安全により快適に登山を楽しむための、中高年登山の虎の巻。
河村正之 著	山本正嘉 著	福島正明 著	芳野満彦 著	樋口英子 著	岳人編集部編	福島正明 著	岳人編集部編	石井光造 著	飯田睦治郎 著	桜井博幸 著	廣川健太郎 著	工藤隆雄 著
1500円	2000円	1500円	1262円	1500円	1400円	1600円	1400円	1300円	1359円	2500円	1500円	1600円

※本体価格に消費税が加算されます。

ヒマラヤへの装備

●遠征隊の装備、相談にのります。



Mt. EXPEDITION SHOP ICI ISHII SPORTS

●登山本店/〒169-0073 東京都新宿区百人町2-2-3 ☎03-3208-6601
●新宿西口店/〒160-0023 東京都新宿区西新宿1-16-7 ☎03-3346-0301
●神田登山店/〒101-0051 東京都千代田区神田神保町1-6-1(タキビル2F) ☎03-3295-0622
●神田本館/〒101-0051 東京都千代田区神田小川町3-10 ☎03-3295-3215
●八王子店/〒192-0081 東京都八王子市横山町3-12 ☎0426-46-5211
●大宮店/〒330-0802 埼玉県さいたま市宮町1-37 ☎048-641-5707
●高崎店/〒370-0831 群馬県高崎市新町5-3 ☎027-327-2397
●川越店/〒350-0045 埼玉県川越市南通町14-4 ☎0492-26-6751
●甲府店/〒400-0814 山梨県甲府市上阿原町481-1 ☎055-221-0141
●宇都宮今泉店/〒321-0962 栃木県宇都宮市今泉町1560 ☎028-639-9650
●太田高林店/〒373-0825 群馬県太田市高林東町1386 ☎0276-38-0620
●松本店/〒390-0874 長野県松本市大手3-4-24 ☎0263-36-3039
●長野店/〒380-0825 長野県長野市末広町1356 ☎026-229-7739
●新潟店/〒950-0087 新潟県新潟市東大通2-5-1 ☎025-243-6330

●新潟とやの店/〒950-0982 新潟県新潟市堀之内南1-16-52 ☎025-241-5134
●仙台店/〒983-0852 宮城県仙台市宮城野区榴岡4-1-8 ☎022-297-2442
●秋田広小路店/〒010-0001 秋田県秋田市中通1-4-5 ☎018-884-1771
●盛岡大通店/〒020-0022 岩手県盛岡市大通1-10-16 ☎019-626-2122
●札幌店/〒060-0062 北海道札幌市中央区南二条西4-8 ☎011-222-3535
●北十二条店/〒001-0012 北海道札幌市北区北十二条西3-5 ☎011-747-3062
●伏古店/〒007-0861 北海道札幌市東区伏古一条4-1-45 ☎011-787-0233
●平岡店/〒004-0874 北海道札幌市清田区平岡四条1-43-9 ☎011-883-4477
●外館部(メールオーダー係)/〒169-0073 東京都新宿区百人町2-2-3 ☎03-3200-7219



ICI 石井スポーツ

事務所/〒169-0073 東京都新宿区百人町1-4-15 ☎03-3200-1004